

「2年生が1年生に教える」「1年生が2年生に学ぶ」 教授法の意義について

野口美乃里・木村安宏・米倉慶子・丹羽ヤエ子
永田 誠・川邊浩史・坂井加奈・高尾兼利

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成22年2月9日受理)

**On the Significance of the Method of Teaching of
“ Students in the Second Grade Teach Students in the First Grade”,
and “ Students in the First Grade Learn by Students in the Second Grade”**

Minori NOGUCHI Yasuhiro KIMURA Keiko YONEKURA Yaeko NIWA
Makoto NAGATA Hirohumi KAWABE Kana SAKAI Kanetoshi TAKAO

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nisikyusyu University Junior College*)

(Accepted February 9, 2010)

Abstract

In the Training Institute of Cape Hado, the students of department of early childhood education and care Nisikyusyu University Junior College took lessons of Lodging and training in May 2009.

The students in the second grade taught the first grade eagerly. The students in the first grade took this lessons seriously and faithfully.

We'll report the details of their taking lessons from teaching method' standpoint.

Key words : Method of teaching 教授法
Interaction between students 学生間の相互作用
Lodging and training 宿泊研修

1. 結 言

教師の指示は通りにくい。先輩の指示は通りやすい。時には先輩の言うことが「金科玉条」になることさえある。これに類する話をよく耳にする。小学生にこれは当たらない。中学生、高校生の時期に見られやすい現象である。大学生にも残る。

発達心理学では、思春期、青年期は大人や教師の否定的側面が自ずと気になる、鼻につきやすい季節である。大人を否定しやすい時期となる。また、新たな理想を知らず知らずのうちにこれまでとは違った強さで求める時期でもある。この否定と、新たな理想の追求、この両者はこれまで依存してきた対象から独立し、新たな理想を自らのうちに築く過程の原動力となる。

先に述べた現象がその断片である。教師を否定し、先輩を理想化して、取り入れる。これは青年期思春期の自然な発達といえる。望ましい方向といえる。ただし、この否定を教師がそのまま受容していいかという、それは望ましいこととは言えない。青年の心理的発達を促すことにならない。教師、大人は毅然としてそのあり方を示しておくことが求められる。いわば壁になることが必要であり、この態度が青年の発達を促すものと思われる。

一方青年は大人になりたいとの願望も抱いている。すなわち、教え導く存在、支援を与える存在としての自己を実感したいとの願望も持つ。指示する大人を否定しながら、指示する存在を志向するものと思われる。

さて、この青年期の特徴を、短期大学の教育に取り入れるとすれば、どういったことになるのか。これを具体化したものが、今回の試みである。後輩（1年生）が先輩（2年生）に学ぶ教育環境を提供する。この試みは、安田女子短期大学と岡崎女子短期大学の実践（GP報告書）を参考にした。前者は短期大学生としての初期適応を先輩後輩の学習の核にしている。後者は、地域の乳幼児に遊びを提供する活動を学習の核にしている。両者とも、多大なる成果を上げたプログラムであり、文部科学省のGPに採択されている。われわれの試みは、1年生の入学間もないところでの、大学適応と幼児保育者になるための学習の意欲啓発を核に据えたものである。

2年制短期大学の先輩と後輩は時間にすれば1年間の違いである。在学生の間でこれ以上の差異は通常ありえない。4年制大学の場合は3年間の違いになる。1年生と2年生で比較すれば1年間ということになるが、

短期大学の2年生と4年生大学の2年生はその完成度が違う。後輩すなわち1年生の理想としては、短期大学の2年生の魅力が大きいと思われる。4年生大学の4年生に比べると、短期大学の2年生は理想形として熟成しているとは言えないが、短期大学の学習内容が実践的な部分が肝要なところを考えると、理想として十分その機能を果たせるものと思われる。また、1年生にすれば、1年先は私も同じようになる、との感覚を容易に抱くことができる。これは同一化を強力に後押しする。教える立場の2年生からすると、逆に1年前は、比較的容易に思い出すことができる。2年生が1年生の思いに近づくことができる。いわば、共感力を発揮しやすい状況での指示ができるし、モデルを示すことができる。題名の教授法が最も効果を発揮できる環境が短期大学であるといえるかもしれない。

先輩に当たる2年生にもたらされるものはなんだろうか。それは先の「大人になりたい願望」に関わってくる。すなわち、2年生は今回の試みの中で、1年生に指示し、モデルを示すことで、いわば大人の役割を果たすことで、大人の力を一部身に着けることになるかもしれない。

以上のような思考の中で、以下に紹介する実践が試みられた。その経過、教育の効果、考察を以下に記すことにする。

2. 「共に学ぶあすなろう」 の位置づけとその意義

1) 「共に学ぶあすなろう」の新設

「共に学ぶあすなろう」は平成19年（2007年）度に新設された一般教育科目である。演習の形態で、2年間にわたり展開される。この科目の必要性は、学則変更内容

表 1

回	時期	内 容	形 態
1	4月	オリエンテーション	1年生のみ
2	4月	体験学習① 新入生歓迎行事への参加	グループごと
3	5月	保育者スキルアップ講座① 「子供の命を守るために」	1, 2年合同
4	6月	保育者スキルアップ講座② 「社会人のマナーを学ぶ（コミュニケーションとは）」	1, 2年合同
5	7月	保育者スキルアップ講座③ 「社会人のマナーを学ぶ（裁判員制度を学ぼう）」	1, 2年合同
6	10月	保育者スキルアップ講座④ 「先輩保育者の体験談」 体験学習② 学園祭の企画	1, 2年合同 グループごと
7	10月	体験学習③ 学園祭の準備、実施	グループごと
8	1月	体験学習④ 「先輩の就職活動体験談」	1, 2年合同
9	2月	体験学習⑤ 「模擬面接の実施 －面接からわかる今の自分」	グループごと

上記19年度の教育課程に1泊2日の「波戸岬宿泊研修」が平成20年度より加えられた。

調書には次のように記されている。すなわち、本学では、建学の精神「あすなろう」を特色ある教養教育の柱とし、一般教育科目「あすなろう」及び「あすなろう体験」を開設している。本科目の新設は、「あすなろう」及び「あすなろう体験」に加え、更に人間教育の強化推進の観点から一貫性のある教育体系として整備が必要と判断したためである。「共に学ぶあすなろう」は、「あすなろう」「あすなろう体験」とセットになった、建学の精神を具現化する人間教育の一環としての科目であることが理解できる。また、メリットとして同調書に次のように記されている。すなわち、本科目は、在学2年間を通じて、新規に編成した1年次・2年次が縦割りクラス単位で受講する。この展開方法により、先輩・後輩学生間のコミュニケーションを図ることができ、更に2年次生が牽引的リーダー役として授業活動を自主的に運営していく教育内容である。そのため、人間関係およびコミュニケーション能力を高めることができ、将来保育者にとって必要な基礎的教養や資質の向上に繋げることができる。本科目は、保育者に必要な知識・技術養成教育を骨子とし、専門職域に密着した斬新な教養教育科目といえる。

開講初年度の計画は表1の通りである。

2) 「共に学ぶあすなろう」の意義

「共に学ぶあすなろう」の意義は前述したとおり、2年生と1年生の交流により、相互に学び合い、成長していくところにある。この意義をより豊かにしていくために、「波戸岬宿泊研修」が新たに加えられたのである。「宿泊研修」は、前身の佐賀短期大学幼児保育学科でも実施されていた。永原学園創立50年誌によると、その概要は以下の通りである。「2年生を対象に、就職対策の一環として規律正しい社会人としての生活を身につけるための教育が、県立川上青年の家で昭和52年9月8日～10日に実施された。その後昭和58年度から対象を新入生に移し実施されている。本学の建学の精神の徹底を図り、教育課程、履修方法、大学生活等のオリエンテーションおよび集団生活を通して、学生相互の親睦と教職員の交流を目的としている」。それまでの宿泊研修では、教員が学生に教え、学生と教員の親睦、同学年内の親睦が主体であった。「共に学ぶあすなろう」の意義はそれまでの宿泊研修と比べるとその特徴が一目瞭然であることが分かる。

3. 波戸岬宿泊研修の位置づけ

1) 宿泊研修の概要

宿泊研修は2年間に亘る「共に学ぶあすなろう」(以下「共あす」と記述)の中で、最も多くの時間数を割り当てたメイン講座といえる。実施時期は入学後、約1ヶ

月経過した5月中旬の1泊2日間である。1年生全員と2年生の24名(8グループより各3名)、幼児保育学科教員全員が参加し、佐賀県唐津市の「波戸岬少年自然の家」で実施している。

21年度研修の目的は①レクリエーションや野外活動、宿泊体験を通して、学生間および学生と教員間の親睦を図る②2年生を対象に、研修プログラムの計画・実施を通して様々な実務を経験しながら自主的に運営することで、牽引的リーダーとしての成長を促す③保育演習を通して、保育者として必要なコミュニケーション能力や協調性を高める。以上3点である。研修中、全ての活動において2年生が主体となり1年生を指導し、教員は後方支援に徹した。

2) これまでの経緯

本研修は平成20年度に「共あす」に導入され、これまでに2度実施している。

第1回目は平成20年5月17日(土)～18日(日)に実施した。参加者は1年生全員113名及び2年生24名(「共あす」12グループより各2名)と学科教員全員14名であった。プログラムはバス移動中のレクリエーション、グランドゴルフ・ディスクゴルフ等のスポーツレクリエーション、カッター研修、ナイトウォーク、であった。

第2回目は、平成21年5月15日(金)～16日(土)に実施した。参加者は1年生全員76名及び2年生24名(「共あす」8グループより各3名)と学科教員全員8名で、プログラムはバス移動中のレクリエーション、カッター研修、夜レクリエーション、ナイトウォーク、保育演習等であった。

実施時期、参加者は共通しているが第2回目のプログラムには「保育演習」が加えられた。このプログラムは、学生同士が親睦を深めると同時に、1年生が保育演習を通して2年生の姿から保育者としての視点や姿勢を学び、保育者としてのアイデンティティーの萌芽をもたらす機会として加えられた。

本研修はこれまで2度実施されたのみで、これから先、更なる変容を続けながら、その意義を確立していくものと期待される。しかし2回を実施し、ある一つの方向性を見出すことができた。それは「2年生が教え、1年生が2年生に学ぶ」ことであり、お互いが学び合うことで両者の成長が得られることである。

宿泊研修の導入は、休・退学者の増加に端を発している。また休・退学までは至らなくとも、新しい環境に馴染むことや人間関係の構築が難しい学生、コミュニケーションの苦手な学生が増えたことは明らかであった。そこで新入生同士・新入生と2年生・新入生と教員が親睦を深め「仲間作り」のきっかけを提供し「適応を支援」することが考えられ、その主眼は新入生のみに向けられ

ていた。しかし実施の中で、「教員ではなく2年生が教える」ことが1年生に対して予想以上の教育的効果をもたすことに加え、研修を計画・準備から主体的に運営し「1年生に教える」ことで2年生自らも実に多くを学び、人間的成長を遂げること、すなわち2年生への教育的効果も非常に大きいことが判ってきたのである。

3) 21年度研修の実際と学生の様子

(1) 準備

準備は研修1ヶ月前、4月15日に開始した。2日間の研修期間中教員は介入を控え、2年生が1年生を指導することをしっかり確認させ、研修に参加する24名の2年生全員が自ら計画し、準備を進めるよう指示した。以下日程を追って、より詳細に紹介する。

4月15日

「共に学ぶあすなろう」のオリエンテーションにおいて、宿泊研修に参加する2年生を各グループで選出し、24名が顔合わせ後リーダー2名を選出する。教員より保育演習の概要を伝える。レクリエーションの内容を次回ミーティングまでに決定しておくように指示する。

5月7日

研修の流れを確認し、使用教室や雨天時の活動について話し合う。バスレクリエーション・夜レクリエーション・ナイトウォーク・保育演習それぞれのリーダーを決定し担当別に内容の検討や準備物のリストアップをする。

5月8日

リーダー4名及び学科長が波戸岬少年自然の家へ赴き、打ち合わせを行う。研修の詳細の確認、施設内の見学、肝試しのルート決定、使用教室の確認等を行う。

5月7日～10日

各グループで保育演習のための絵本を選択する。小道具やお面作製の為の準備物（色画用紙の色別枚数、段ボール個数等）リストを作成し保育演習リーダーに提出。

5月11日

リーダーより現地打ち合わせについて報告。部屋割りの計画。それぞれ担当別に内容、手順等の打ち合わせ、準備物の買い出し。

5月14日

全体リーダーが自主的に作製した研修のしおりに沿って最終確認。それぞれの担当リーダーより計画内容を伝達し、シミュレーションする。入退所式、朝・夕べの集いの担当決め。名札作製。

(2) 研修当日 一日目

2年生は1年生集合時間の30分前に集合し、準備物の確認、積込みの後1年生の誘導及び出席確認を行う。

① バスレクリエーション

3台のバスにグループ別に分乗、移動中2年生がレクを進行した。自己紹介・手遊び・サイレントシンキング

遊び・ビンゴゲーム・体験談及び質問コーナー（1年生が学習や学生生活、実習について質問し2年生がそれに答える）

研修の始りは2年生の気合と緊張が1年生に伝わり合い、やや硬いスタートとなったが手あそびやサイレントシンキング遊びでは、保育現場のバス遠足のような雰囲気となり、リラックスすると共に皆で盛り上げようという空気が漂った。1年生にもこの研修の目的が伝わり始めていた。

② カッター研修

波戸岬少年自然の家は玄界灘に面しており、ここで研修する小・中・高校・大学の多くがカッター研修をプログラムに取り入れている。指導員の直接指導のもと24人を一グループとしてカッターに乗り込み12本のオールで漕艇する。集団への安心感、信頼感が増し自己開示しやすくなると共に協調性が育まれ、互いに協力できる仲間づくりができる。カッター研修は1年生のみで行った。その間2年生は翌日の保育演習で使用する大道具、小道具の作製及び保育演習の進行の打ち合わせを各グループで行った。

③ レクリエーション

2年生の指導によるレクリエーション。伝言ゲームやモンチッチジャンケン等、グループの結束や保育を意識したレクリエーションを行った。

④ ナイトウォーク

日没後、敷地内の自然学習のための遊歩道で肝試しを行う。2年生が脅かし役として様々に扮装し、遊歩道内で待機し、1年生は5分おきにグループ毎に出発した。恐怖感や不安な気持ちを仲間と支え合い乗り越えた。

(3) 研修当日 二日目

① 保育演習

各グループの2年生3名が研修前に選択した絵本を題材に、2年生の演出により、1年生が劇を演じた。2年生の指導のもと、それぞれの役を表現するお面等を作製し、練習の後発表した。

2年生の役割は以下通りである。

- ・絵本の選択（少なくとも9名の配役を必要とし、30～40分間で練習でき、8分以内に纏めて発表できるもの）
- ・お面、小道具作製の為の材料調達。
- ・絵本を劇にする為の台本作成。
- ・小道具の作製
- ・1年生に絵本のストーリー、劇の展開について説明し、1年生の配役を決める。
- ・配役に沿って1年生のお面作製の指導。
- ・劇を演出し1年生と共に練習する。
- ・発表においては1年生のサポートをする。

1年生の役割は以下の通りである。

- ・絵本のストーリー、劇の展開について理解し配役を決

める。

- ・割り当てられた役を表現するお面を作製する。
- ・台詞を覚え、2年生と共に練習をする。
- ・発表会で劇を演じる。

保育演習では1年生、2年生が異なった役割を担いながらも短時間で劇を形にし、全員の前で発表することが課題であるため、グループ内のコミュニケーションや相互協力が必要となる。2年生は実習で経験した指導計画作成や単元保育実施の経験を基に、保育現場の子ども達に劇発表の指導をする保育者さながらに、作業の手順や演出のイメージを伝え、1年生のアイデアを取り入れながら段取り良くリードしていた。また小道具や演出方法にも随所に創意工夫が見られ、1年生と共により良い発表をしたいという意欲が感じられた。1年生は2年生を尊敬の眼差しで見つめ、そのリードに素直に従いながら、自らもアイデアを出すなど、心を開き、打ち解けて活動する姿が見られた。同じ目標を持つ先輩・後輩という意識で協力し合い、一つの作品を作り上げ皆の前で発表することによる一体感や達成感、共に表現する喜びが伝わった。

4) 波戸岬研修の意義

本研修は多様なプログラムで構成されているが、その全てを通し「2年生が1年生に教え、1年生は2年生の姿に学ぶ」ことで一貫している。入学したての1年生にとって2年生の姿は頼もしく輝いて見え、保育者としても1歩も2歩も先を行く2年生の姿を1年後の自分のモデルとして見ていることだろう。また語らいや体験談を聞くことで、その先輩も1年前は今の自分と同じように戸惑い、不安で一杯であったことに気づく。教員では上手く伝えられないことでも、1年前同じように経験した先輩だからこそ伝えられるものがある。それは1年生の戸惑いや不安を解きほぐし、心を開かせる。1年生はこれから2年間の短大生活において、何かに躓いた時すぐに相談できる仲間・先輩・教員がすぐ傍にいることを確認する。また2年生はそこに1年前の自分の姿を見るからこそ、1年生の為に一生懸命に準備し、教員に頼らず自分達の力で成し遂げようとする。1年生の気持ちになって考え、教えることで2年生も実に多くのことを学んでいる。研修を無事終えた時、その表情には責任を果たした安堵と共に、達成感と自信が滲んでいた。本研修の意義は正に「共に学び合う」ことにあるといえる。

4. 教える側（2年生）にとっての

波戸岬研修の意義

1) アンケート調査の結果と考察

(1) 方法

① 対象

宿泊研修を企画運営した幼児保育学科2年生21名

② 手続き

宿泊研修後にアンケート紙調査を実施した。「波戸岬での研修体験が私にもたらしたこと」をテーマに、「1. 先生に教えられときの『私』（学校での私）と、後輩に教えているときの『私』（研修中の私）の違い」「2. 波戸岬研修で後輩に教えるときに、これまでの、大学での学習がどのように生かされたと思いますか。これまでの学習が役に立ったと思われる場面と、その能力をどんな学習場面で身に着けたと考えるか、準備段階も含めて書いてください」の問いに自由記述で回答を求めた。なお、書き方として、「役に立った場面の記述（学習場面の記述）」を示した。

上記により得られた回答をKJ法により分類した。その回答から、「教える立場」「教えられる立場」を基本とした文脈を抽出し、ラベルを作成した。得られたラベルからグループ編成による表札作りを反復し、最終的に編成されたグループを図解化し、さらに叙述化した。

2) 結果と考察

(1) 先生に教えられるときと後輩に教えているときの違いについて

以下の8グループに分類した。「教えられる立場」(21%)「教える立場を理解」(15%)「教える立場の気持ち」(17%)「細かい計画」(11%)「責任感」(7%)「リーダーシップ」(9%)「後輩への思い」(11%)「研修効果」(9%)に分けられた。括弧内の数値は、全体に占めるそれぞれの項目の占める割合である。以下、同一表記とした。

「教えられる立場」は、学校での教員と学生のある関係である。「教える立場」(理解・気持ちを含む)は波戸岬研修において2年生が1年生に教える関係である。この「教えられる立場」と「教える立場」の関係は相対立、反対するものであり、また互いに因果的関係にある。

「教えられる立場」と分類した項目の具体的回答は、集中して聞かない、内職する、だらけた気持ち、発言しないなどが多く、特に「受身」の言葉を挙げたものが目だった。

「教える立場」は「教える立場を理解」と「教える立場の気持ち」とに分類した。「教える立場を理解」では、2年生が1年生に教えるという初めての体験により、教える難しさ、教えられていることの大切さ、先生のすごさ、考える機会が多い、逆の立場を考えるようになった、気付いていなかった事が多くあったことに気づいた、教える立場になって教えられていた姿が理解できた、などの回答記述があった。反対の立場になっての気づきが多

かった。「教える立場の気持ち」は「教える立場を理解」と深く相互に関係している。「教える立場の気持ち」の回答記述は以下の通りである。今までの知識を工夫し出し切った、パワーがいる、いきいきした自分、頭の中が真っ白になり早口になった、自分でも頑張ったと思う、話を聞いてほしいと思った、一人くらいなら聞かなくてもとの安易な気持ちではいけない、話を聞かずに指示どおりされないと危険、おしゃべりは困る、集中して聞いてほしいなどの記述であった。教える立場に立ったときの多様な気持ちが語られている。また、聞いてもらえないときの不安、うまく伝えることができたか不安、1歳年上の言うことを実行してくれるのか不安、2年生のリーダーシップが取れるのか不安、同級生の気持ち、など心の葛藤も垣間見られる。

「後輩への思い」は、「教える立場を理解」「教える立場の気持ち」と関係が深いと言える。2年生が、考えながらアイデアを出したり意見を聞いたり、1年生に寄り添い共に協力しながら、自分も後輩も共に楽しめるように努力したことが分かる。特に協力していこうとする気持ちや、後輩に楽しんでもらいたいという気持ちが強いことが窺えた。

「細かい計画」は、事前に事細かな指導計画の必要性を感じたこと、時間配分やわかりやすく伝える方法を工夫する、常に考えながら行動していることなどの回答記述に当てた。2年生が研修期間中の殆どを高い集中力をもって過ごしていたことが伺える。

「責任感」の項目の具体的回答は、1年生を任されているという責任を強く感じ、適当な気持ちではだめだ、である。研修指導に臨んで、意識を新たにしていると思われる。

「リーダーシップ」は、積極的にしなければ、自分が動かないと、意欲的に行動した、積極的に活動したなどである。リーダーとしての立場を理解し、リーダーシップを発揮していることが伺われる。ところで、「積極的に」という表現は、「リーダーシップ」として分類した具体的回答記述の約6割に見られた。

「細かい計画」「責任感」「リーダーシップ」は、指導時の具体的態度を表し、「教える立場を理解」「教える立場の気持ち」「後輩への思い」は指導を始める前の基本的心構え、または心境を表している。両者は深い関係にあると思われる。

「研修効果」は、本当は出来るということに気づいた(自信を持った)、前向きな気持ちで取り組んだ、1年生のために積極的に関わろうとする自分がいたなどの具体的記述を代表した。学生が、以前の自分でない自分がいることに気がついたことや、大人数をまとめることの難しさを体感していることが窺える。

(2) 大学での学習成果の効用について

具体的回答は、「役に立ったと思われる場面」と「学習場面」とに分けた。

「役に立ったと思われる場面」は10項目に下位分類された。「バスレクリエーション」(44%)「保育演習」(26%)夜のレクリエーション(9%)「全体活動の中で話す」(6%)「コミュニケーション能力」(3%)「楽しい雰囲気作り」(3%)「時間配分に配慮した行動」(3%)「研修全体」(2%)「食事マナー」(2%)「チームワーク」(2%)であった。「バスレクリエーション」の具体的記述は、手遊び・歌遊び(71%)、お話(29%)であった。「保育研修」は お面・大道具・壁面製作等の準備物製作(65%)話すこと(35%)であった。

「学習場面」は10項目に下位分類された。「実習」(33%)「音楽表現」(22%)「リズム表現」(20%)「図画工作」(10%)「様々の授業」(4%)「去年の研修」(4%)「中学高校の部活動」(4%)「アルバイトの接客」(1%)「後輩との会話」(1%)「幼少期の絵本」(1%)である。頻度上位3項目の学習場面での共通点は、人の前で恥ずかしがらずに自己表現することである。授業形態は演習がほとんどである。こうした科目が今回の研修指導で「役に立った」と意識されていると思われる。

(3) まとめ

以上を総括すると次のように思われる。先生に教えられときの「私」(学校での私)と、後輩に教えているときの「私」(研修中の私)、この両者は互いに対立する立場になることが、特徴的である。学生は、教えられときは消極的で受身であり澁刺さもなく、理解しようとしませんが、反対に教えているときは、積極的に行動し理解させようという工夫や努力をしている。また気持ちが生き生きとしている自分を発見している。さらに、理解させようとする中で、細かい計画が必要なことに気づき、リーダーシップをとることの大切さを痛感し、責任感が生まれていることが分かる。われわれ教員の想像以上の気づきを学生が得ている。また、教員の立場の大変さも理解できるようになっている。加えて後輩への配慮も見られている。たとえば、「どんな気持ちでいるのかな」、「気持ちに寄り添ってあげたい」、「理解しやすい伝達方法は」、「しっかり話を聞いてくれるかな」などの回答にこれが表れていた。

これまでの学習が役に立ったと思われる場面と、その能力をどんな学習場面で身に着けたと考えますかでは、すなわち学習の成果の効用については次のことが言える。実習(保育所実習・幼稚園実習)での学びの中で、一番多かった。このことを強調しておきたい。園児の前でのお話や、手遊び、歌を歌うことなど多くのことを実習で体験し、このことが研修指導で生かされたのである。また、実習で多様な場を踏んでいるため、後輩を指導する度胸がついたともいえる。また音楽表現やリズム表現

等の科目でも、恥かしがらずに人前で演じる態度などが身についており、これが生かされたと考えられる。図画工作では塗ったり、切ったり、貼ったり、色彩を考慮したりと、いろいろな製作に関することを学び、保育研修の指導のなかで特に役立っていることが分かった。この1泊2日の波戸岬研修での効果は大きいと考えられる。

2 2年生対話の結果と考察

1) 方法

宿泊研修終了後、リーダーとなった2年次学生のみを集め、「感想と1年生に伝えたいこと」をテーマにグループごとに対話を行った。本節では、その際の記録をもとに、2年次学生の波戸岬研修の意義について考察を行う。

2) 結果

2年次学生の、宿泊研修後の反省・感想ならびに「1年生に伝えたいこと」については、以下の通りである。

(1) 全体について

- ① 全部関わった。準備物のリストアップは指示された。役割分担、事前見学、スケジュール調整、指示したら全員参加した。グループ内での話し合いも指示したとおりにやってくれた。グループ内のコミュニケーションも計画通りにできた。
- ② リーダー中心に進めてもらった。みんなで協力できた。
- ③ 話し合いが全体でできなかった。内容が薄くて、昨年よりつまらないような内容になるのではと心配した。しかし、すばらしいものになった。リーダーは影で動いていたのではと頭が下がる。
- ④ リーダーのお陰で、私たちの知らないところで流れができていて、感心した。

(2) バスでのレクリエーションについて

流れをみんなで考えた。去年が楽しかったからそれを参考にした。実習で1年生が使えるものを選択した。1年生がもらって、喜ぶ顔を想像して、選んだ。話し合う場ができた。

(3) 夜のレクリエーションについて

先生に伝言ゲームについて尋ねた。やり方を工夫する必要があった。内容を入浴の時間に書いた。モンチッチ体操の景品は3位までとした。ただし、1番最後の人に景品をやることを考えた。最初から並ぶ人であり、大変だろうなという気持ちからこうした。

(4) 肝試しについて

去年はお面が一杯あったような気がする。去年を超えようとお面を買いに行った。一つだけ買った。1年生が泣いた時、大成功と思った。

(5) 保育研修について

去年なかったのが戸惑った。リーダーの中にもイメー

ジがなくて、不安で一杯だった。絵本を選んだ。必要なものを買い出しに行く時も「どうなるか」との思いであった。本番でのみんなの意欲的な姿を見て、発表が始まる頃「いけるかな」と思った。よく協力してくれた。グループ内で話し合ったのがよかった。

(6) 1年生に伝えたいこと

- ① ぜひみんな積極的に参加してほしい。研修会楽しいよ。
- ② 事前にしっかり段取り決めてばたばたしないようにしたい。雨の活動を考えてくれていたら。
- ③ 1年生と2年生が交流できるから、いいよ。
- ④ リーダーが動いてくれるが、周りの協力が大切です。
- ⑤ リーダーに協力して、自分たちが楽しむことが大切。
- ⑥ リーダーに頼り切らないようにしたい。
- ⑦ 準備が大切。先のこと先のことを考えておく。
- ⑧ 前もって計画する。買出しには領収書を忘れない。
- ⑨ カリカリせず楽しんでほしい。
- ⑩ 楽しい思い出にしたいのなら、2年生どうし仲良くして、楽しさをアピールする。
- ⑪ 1年生との交流は仲良くなれるし、誰かのためと考えたら動くことができる。
- ⑫ がんばった分だけ楽しくなる。
- ⑬ 自分から楽しむ気持ち。活動を盛り上げる気持ち。いざこざを目撃したが、反省会のとき笑って話せるように。思いやりが必要。
- ⑭ 人から「こうだったよ」と教えられるより、実際に経験することで気づくこと、発見することがあると思う。
- ⑮ 1年間短大で勉強して、1年生の前で話せるようになった。学校で習ったものを話せた。研修で習ったことを出せた。
- ⑯ 1年生どうし、2年生どうし、1年生と2年生、人とかかわりを大切にしてほしい。
- ⑰ 買出しは早めにする。2年生が余裕を持つべき。教えてもらったり、教えたりで現場にも役に立つことがあると思う。
- ⑱ 前準備に時間が少なくてばたばただった。計画が大切。しかし、当日に「あ、どうしよう」の事が起きると、みんなが協力して解決していくものである。報告・連絡・相談が一番大切だと思う。2年生は前もって話し合っている、当日も話し合った。何となく「どうする」と集まり、話し合った。

3) 考察

この2年生の波戸岬宿泊研修に関する対話結果を見ると、まず第1に、昨年の自分たちが経験した内容を越えようと、主体的に考え、準備を進めてきたという点が見取れる。感想の中でも、「内容が薄くて、昨年よりつま

らないような内容になるのではと心配した」、「去年が楽しかったからそれを参考にした」といった昨年度の内容を意識した発言が多く聞かれた。

第2に「実習で1年生が使えるものを選択した」、「1年生がもらって、喜ぶ顔を想像して、選んだ」や、肝試しの際に「1年生が泣いた時、大成功と思った」など、1年生をいかに楽しませ、1年生にとって、いかに意義ある研修にするかという点が意識されていたことが分かる。つまり、2年生は、自らの楽しみや満足感を求めるのではなく、「1年生のために」という想いのもと、準備や進行をしていたことが読み取れる。他者理解や思いやり、共感といった保育者にとって必要不可欠な能力につながるものであると言える。

最後に、2年生は、この企画を主体的に企画したことが大きな学習となり、かつこうした経験を1年生に積極的に引き継いでもらいたいとの想いを持っていることが読み取れる。実際に、1年生に伝えたいこととして、「がんばった分だけ楽しくなる」や「ぜひみんな積極的に参加してほしい」といった大変さの中にも宿泊研修の楽しさがあり、それを伝えようとする発言が聞かれた。加えて、「前準備に時間が少なくてばたばただった。計画が大切」、「事前にしっかり段取り決めてばたばたしないようにしたい」といった自らの反省を次につなげて欲しいといった発言や、「実際に経験することで気づくこと、発見することがある」、「教えてもらったり、教えたりで現場にも役に立つことがある」といった今回の経験から自らが学んだことを、次のリーダーとなる1年生にも学んで欲しいといった願いが表現されている。

2年生リーダーにおける対話の結果をみると、1年生と2年生の交流という本事業の目的に対して、「自らに何ができるのか」を主体的に考え、また仲間と協力し、準備を進めてきたことはもちろんであるが、この幼児保育学科の宿泊研修という企画に対して、先輩から引き継いだ経験をもとに、次の世代に受け継いでいきたいという意思が、学生自身に芽生えていることがわかる。こうした想いは本学科のアイデンティティ形成に大きな貢献を果たすと言える。加えて、こうした学生の主体的参画による企画は、決して机上では学びえない、学生にとっての社会性や思いやり、共感といった内面的な成長に向けた貴重な学習の機会となっていることが明らかとなった。

5. 学ぶ側（1年生）にとっての

波戸岬研修の意義

1) 方法

(1) 対象：宿泊研修に参加した幼児保育学科1年生76名

(2) 調査時期 2009年5月

(3) 手続き

宿泊研修の全日程終了時に各自にアンケート用紙を配布し、「先生から教えられるとき、2年生から教えられるとき、私のための違い」の問いに自由記述で回答してもらった。本調査は授業の一環でもあるため、記名式でレポートとして提出してもらった。ただし、記名することによる回答の歪みが生じないように、「素直な気持ちを記述すること」「内容についての優劣はつけない」と付け加えた。その回答から「教師の指導による学び」、「2年生の指導による学び」を示す文脈を抽出し、ラベルを作成した。得られたラベルからグループ編成による表札作りを反復し、最終的に編成されたグループを図解化し、さらに叙述化した。グループ編成は3人の授業担当者により行い、KJ法の経験のある教員がラベルの内容が本研究の意図を網羅していることを確認した。

2) 結果と考察

「教師の指導による学び」に関するラベルは97件抽出された。また「2年生の指導による学び」については15件抽出された。さらに類似した内容を集め項目を編成した。その結果、「教員の指導による学び」は9項目、「2年生の指導による学び」は8項目のグループに分類することができた。それぞれのグループには内容的に該当すると考えられるカテゴリー名をつけた。

さらに、これらのカテゴリーは、1年生の視点から、“肯定感”“否定感”という大きな二つの枠で捉えることができた。そこで“教員の指導による学び”と“先輩の指導による学び”のそれぞれで“肯定感”“否定感”項目に分けて記述を試みる。

(1) 教員の指導による学び

カテゴリーの種類と度数、及び代表的な回答例について表2に示す。

“肯定感”のカテゴリーとしては「全般的な信頼感」「適切な教示や指示を行う技術」「学生の自立を促そうとする教員の意図」の理解」「サポート感」が含まれる。これらを分析すると、1年生にとって教員は、これまで培われた専門的知識を教授し、教育経験を基に実地場面における的確な指示を出してくれる存在と捉えられていることが分かる。また、短期大学部という2年課程の教育の特性を十分に理解した上で指導するために、学生の自立を促すサポートが可能となっていると捉えられている。これらの結果が、教員を“教授者”として信頼していることにつながっていると思われる。

一方“否定感”のカテゴリーとして「緊張感・重圧感」「授業のような堅い雰囲気」「義務感・やらされ感」「教えられることへの慣れと意欲低下」「教員の意図と学生

表2 「教員の指導による学び」の分類表

カテゴリー
(ラベル数)

回答例

肯定感	全般的な信頼感 (16)	・素直に話が聞ける ・緊張せず話することができる ・受け入れてもらっている
	適切な教示や指示を行う技術 (12)	・夢があるものとして教えてくれている ・必要なことを教えてくれた ・目指すことだけを教えてくれている
	“学生の自立を促そうとする教員の意図”の理解 (2)	・一人の力で何とかできると促してくれる ・あえて1から10まで教えてはくれない
	サポート感 (1)	・いつも励ましてくれる
否定感	緊張感・重圧感 (22)	・気持ちが重くなる ・自分なりの表現ができない ・遠慮がちになったり、緊張したりする
	授業のような堅い雰囲気 (17)	・授業のようで堅い感じがする ・授業の延長みたい ・授業の一環でしかない感じ
	義務感・やらされ感 (16)	・先生たちが言うことをやっているような感覚 ・一方的に教えられている ・黙って従ってその通りにやっている
	教えられることへの慣れと意欲低下 (6)	・先生から「こうやりなさい」と言われてもあまり真剣にやらない ・教えてもらおうのが当たり前
	教員の意図と学生の受け取り方の違い (5)	・何か違うと思った ・理解できないところがある

計97ラベル

の受け取り方の違い」が当てはまる。

カテゴリー全体から学生にとって教員は一線を引いている存在であることがうかがえる。それは日常の学生生活は講義が中心となっているためであろうか。当然教員は学生に対して、教育的な態度で接していることになる。そのことが、時と場合によっては学生にとって緊張感・義務感と感じ取られてしまうのであろう。このことは大学教育の上で必要なことであるが、やる気のない学生や感受性の強い学生にとってはネガティブな側面となってしまう可能性も否定できない。教員は良かれと思い伝えていることも、その意図が十分に理解されないまま指導を受けると“やらされ感”“学習意欲低下”につながるものが予測された。

(2) 2年生の指導による学び

カテゴリーの種類と度数、及び代表的な回答例について表3に示す。

2年生の指導に対する項目も同様に“肯定感”“否定感”に分類して記述する。

“肯定感”のカテゴリーとしては「自分自身を表現しやすいような雰囲気」「楽しい雰囲気」「願望・憧れ・尊敬」「気持ちの共有と投影」「年齢が及ばず親近感」「理解しやすい教示とフォロー」である。

教員とは異なり、2年生は年齢が近く、1年生自身が目指す将来が共通していることもあり、親近感がわき、和気藹々と活動を進めていくことができるようである。また、2年生は1年生よりも今回の研修などでは、実習などで学んできたことがリアルタイムで伝えられるため、

表3 「先輩の指導による学び」の分類表

カテゴリー
(ラベル数)

回答例

肯定感	自分自身を表現しやすい雰囲気 (48)	・コミュニケーションがとりやすい ・自由に自分で作っていいよと言われた ・分からないことは何度も聞くことができた
	楽しい雰囲気 (19)	・先輩から教えられたら気持ちが楽になる ・リラックスして聞くことができる ・楽しく一緒に学ぶことができる
	願望・憧れ・尊敬 (15)	・2年生も「先生＝保育士」に見えてきた ・自分も先輩たちのようにならなくてはいけない ・1年という差がこんなにも違うんだなあ
	気持ちの共有と投影 (13)	・リアルに自分の心に入ってきた ・恥ずかしい気持ちとか、同じ目線で分かってもらえる感じがしてやりやすかった
	年齢が及ばず親近感 (12)	・年も近いしけっこう自分たちの考えとか気持ちとか分かってくれる ・歳も近く、気軽に話しかけられる
	理解しやすい教示とフォロー (12)	・来年につなげるように教えてくれる ・自分の経験を言ってくれる ・すぐフォローしてくれる
否定感	教員とは質の異なる緊張感・義務感 (28)	・迷惑をかけちゃいけないと思った ・先輩たちが前だと緊張する ・先輩の反応を見ながらしてしまう
	心理的距離感 (4)	・歳が近くてあまり素直に話が聞けない ・先輩を甘く見ている ・話す機会が少ない

計151ラベル

2年生との技術的な差を目の当たりにして、願望や憧れという感情が生じたと思われる。結果として大学の講義

のような硬い雰囲気はなく、場の雰囲気がとても居心地のよいものになっている。さらに、記述の中には「2年生のように…」「いっしょに…」という表記が目立っていた。これは、1年生自身が来年度は2年生と同じような立場になって次の1年生を指導していくという先のビジョンを感じていることの証拠である。つまり来年の自分の姿を2年次生の中に見出していると考えられることもできる。

一方、「否定感」に関して、少数派ではあるが、「教員とは質の異なる緊張感・義務感」「心理的距離感」の項目が挙がってきた。肯定感と全く異なり、年齢の近さゆえに精神的な甘えが許されず、厳しい先輩像を抱いている回答があった。同じ理由で一つ年上の先輩の発言を鵜呑みにすることができず、信頼感を築くことができない場合もあるようだった。

(3) 2年生による指導の教育的効果

これまでの結果から2年生による指導に教員の場合とは異なる教育効果があることが分かってきた。

大学の講義は専門職を目指す学生にとって基礎的な知識・技能の獲得という点で重要である。これは理論的、系統的に教示していくということから教員による教授法が適切と思われる。それに対して、2年生による指導は、知識・技能の教授というより先輩から後輩へ送られる成功・失敗経験の情報という意味を持つように思われる。特に先輩の後姿に自分の将来像を見出そうとする1年生にとっては、先輩学生の体験が貴重な情報になる。このこととは「学生でなければ教えられないこと」(安田女子短期大学の特色GPの報告書より引用)とつながる。

今回の宿泊研修では体験的な学びを目的としているため、先輩学生の指導を受け入れやすかったことが結果につながったと考えられる。しかしながら、宿泊研修の最終目的は柔軟な思考を持つ専門職の育成である。そのための体験的な知識の獲得と同時に、背景にある基礎的な知識や技能の獲得も必要となってくる。時と場合によっては教員のコーディネートも必要なのである。

総合して考えていくと、「先輩学生による指導」と「教員による指導」の役割分担が適切に行われることが重要になると思われる。毅然とした教員(大人)の態度、それと柔軟な先輩学生の指導と助言の融合が1年生にとっての有意義な学習へつながるだろう。

今後の課題としては、教員と2年生の役割を明確化するための事前の入念な打ち合わせの必要性が挙げられる。安田女子短期大学の特色GP報告書に教員は「求められない限り指導は行わず、側面からの支援に徹する」とある。これまで話し合いは行われてきたが、その際に教員と2年生、お互いの態度をより明確にすることがリーダーとしての2年生を育むことにつながると思われる。そしてそのことが、教員に対する「義務感・やらされ感」

2年生に対する「心理的距離感」の改善にも結びつくのではなかろうか。

文 献

1. 文部科学省, 特色ある大学教育支援プログラム, 事例⑦安田女子短期大学, 財団法人大学基準協会「特色ある大学教育支援プログラム」実行委員会, 2004年, p p 339-343
2. 文部科学省, 特色ある大学教育支援プログラム事例集, 岡崎女子短期大学, 財団法人大学基準協会「特色ある大学教育支援プログラム」実行委員会, 2007年, p p 405-412